



筑波技術大学では、筑波技術大学ニュースのメール配信を行っております。ご希望の方は、件名を「筑波技術大学メール配信希望」、本文に、「団体名（個人名）」をご記入の上、筑波技術大学総務課企画・広報係（kouhou@ad.tsukuba-tech.ac.jp）までメールにてご連絡ください。

● 対談を行いました



8月23日、宍戸理事長をお迎えし、「筑波技術大学の機能強化の取り組みに対する期待」をテーマに対談を行いました。抜粋版を掲載します。

大越 本日は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所理事長の宍戸和成様をお迎えしまして対談を行うことになりました。本日のテーマは「筑波技術大学に期待すること」で、機能強化の取り組みについてご意見を伺いたく存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

早速ですが、本学の機能強化の取組の中で学部教育が最も重要かと思っています。特に現在、初等教育から中等、高等、全てがアクティブ・ラーニングへの変換ということが広く言われています。その中で大学としてのアクティブ・ラーニングをどのように進めるか、幾つか項目を挙げました。

宍戸 アクティブ・ラーニングは、大学のほうでの能動

的学習を実践されて、それは初等、中等教育でも有効ではないかというのが発端だったのかなと考えています。

大越 そうですね。

宍戸 それに関して先生の資料を読ませていただきました。戦略の最初に高大連携、接続の推進というのが挙げられていますね。

大越 はい。

宍戸 これが、とても大事ではないかと私も思いました。

大越 ありがとうございます。

宍戸 特別支援学校との高大接続の教育拠点は、具体的にどうやろうとお考えですか。

大越 実際に現在行っていることから簡単にご説明いた



宍戸 和成(ししど かずなり)氏
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
理事長、本学経営協議会外部委員

しますと、聴覚障害系の産業技術学部では、テレビ会議システムなどを導入し幾つかのろう学校と、一部の授業を共有することや実習などを行っています。また、ろう学校の生徒を本学に招いての体験授業や、逆にろう学校に出向いて出前授業を行ってきました。

宍戸 私が思ったのは、筑波技術短期大学が創設されたときから、技大が持っている本質的な課題なのではないかと思いました。というのは、視覚障害教育とか聴覚障害教育、端的に言うと盲教育、ろう教育の高等教育機関なわけです。したがって盲学校、ろう学校の高等教育部門を担うというのが、短大が設置されたときの創設の理念だったのではないかと思うので、恐らくそれがほかの大学とは違う技大の特色でもあるかと思っています。だから技大で教育実践が行われているということについて、盲学校、ろう学校に還元できることが大切で、これからたくさん発信等を行っていただけないのかなというのが私の期待です。

大越 今は、全国の大学に聴覚障害者ないしは視覚障害者が入学して、それぞれの環境で学習していると思います。このような状況のもと、障害のある学生だけという本学独自の環境の中で、いろいろな場面で学生が常に主役になれるというメリットがあるかなと私は思っています。先生がおっしゃるような、本学の良いところを中等教育の方にも知っていただくのが大事だと思っています。

宍戸 盲学校、ろう学校の専攻科とか、高等部の職業学科との連携というのもとても大事だと思います。そして、大学に進むためには基礎的な学力を育てなければいけませ

んよね。

大越 はい。

宍戸 基礎的な学力を育てるためには教科の指導とか、特別支援学校で言うと自立活動の指導とか、そういう特別支援学校に設けられた教育課程の特色があります。大学の先生方にもそういう教育の内容、学習指導要領の中身を理解していただいて、それをどの様に高等教育機関で引き継いでいくか、連携させていくか、成長させていくかというのが大事だと思うのです。大学の先生方に高等部の教育の教育課程なり実情というものを、きちんと理解してもらえるといいのかなという期待もあります。

大越 そうですね。そういう意味で本学の教員が現場のろう学校、盲学校に出向いて行けるというのは、現場に触れる良い機会かなと思います。

宍戸 聴覚障害とか視覚障害の方々の大学進学率が著しく低いというような現状認識が書いてあったのですが、その低い部分だけでなく、なぜ低いのかということと、どういうふうにすれば学力の向上に結び付くのかということを考えることが大事ですね。

大越 確かに現在は聴覚障害や視覚障害のある方々の大学進学率が低いことがあります。第3期の間に、この進学率を5%ずつでも上げることを目標にしていますが、本学だけの力では無理なので、全国の特別支援学校の先生方の協同が必要です。ただ、生徒さんが進学へのモチベーションを高めるような形にするのに、本学が少しでも関わっていければと思っています。

宍戸 大学院が設置されましたよね。大学院を出ると、こういう夢が叶うのだというような、もっと啓発とか発信ができるといいのかなという期待もありますけど、いかがでしょうか。

大越 本学に大学院ができたということは、本学にとっても大学院を志望する学生にとってもすごくメリットがあることだと思います。障害のある学生が高等教育を更に深められるという意義があります。また、一度社会に出てから学び直しに入って来る学生も多く、大学院の必要性は高まっています。

宍戸 そうですか。

大越 産業技術学専攻の場合、大学院への社会人入学が少ないのですが、保健科学専攻の入学生はほとんどが社会人です。新しくできた情報アクセシビリティ専攻も、現役の学生さんが少ないこともあり、社会人もターゲットにしています。大学院全体としては、今のところ現役が恐らく3分の1、残りの3分の2ぐらいが社会人かなという感じですが、そういう意味で社会人が学びやすい大学院になっていますが、社会人だからといって研究や授業を疎かにできません。仕事を持ちながらの学位取得のため、教員はマンツーマンの授業を土日に行うとか、質疑応答は電話でする

とか、障害の程度や研究内容にもよりますが、いろいろと工夫して行っているようです。

宍戸 そうすると、そういう細かいサポート相手に即して行っているという実態をもっと発信できるといいのではないですかね。そうすると大学院の実態も理解してもらえ、社会人がそうやって学び直しできるのだということにも気付いて頂けるのではないかと。

大越 全くおっしゃるとおりです。どうしても広報活動の範囲が限定されてしまって、本当に本学の情報がほしい人まで届いているかどうか。そこにちょっと問題がありますので、本学としてもホームページ以外にも、例えば聴覚障害関係の団体のフォーラムやシンポジウムで、広報活動をおこなってできるだけ多くの方に知っていただくようにしています。

宍戸 障害者スポーツについての取組も検討されているという話がありましたけど、オリンピック・パラリンピックも近いですし、何か今、試みとしてやっていたりすることはありますか。

大越 従来から行っていたことの1つとして、障害者のトップアスリートを本学でも育成することを目指しています。本学では、パラリンピックの競技種目でもあるブラインドサッカー、ゴールボール、この2つ競技が目立っています。特にブラインドサッカーなど、企業からのバックアップが期待できます。聴覚障害関係のデフリンピックは、陸上、バレー、バスケット、サッカーなど、いろいろな競技で活躍しています。本学から障害者スポーツのトップアスリートが誕生できるようにしたいと思っています。

もう1つは、障害を持った方がどうすればより効果的にスポーツができるだろうという研究・開発をしています。障害者スポーツに焦点をあて競技に対する支援、競技の精度を上げるとか運動能力を上げるのもそうですけど、それプラス測定技術を研究しています。

今後、考えていく上で重要なポイントは観客としての障害者に配慮した競技場の整備です。いわゆる合理的配慮に向けた競技場作りというのが、今後、どんどん進むのではないかと思います。今後、東京オリンピック・パラリンピックの組織委員会にも働きかけていこうということも、少しずつ始めているところです。

宍戸 情報保障については、技大が持っている財産でしょうから、それが発信できるといいですね。

大越 はい。

宍戸 学生さんが教員免許を取れるようになって、教員になるという方も出ていらっしゃるのですか。

大越 はい。平成23年度に教職課程を設置しました。学部を卒業した時点の学生ですとなかなか教員採用試験に合格できない場合もあるのですが、大学院を出てから、ないし本学の卒業生が他の大学院に行く、教育学部のあるよ



大越 教夫(おおし のりお)
国立大学法人筑波技術大学学長

うな教育大学の大学院へ行った後に教員になる例があります。ここ2年連続で2名ずつ、聴覚障害の学生が教員になっています。

宍戸 盲とろうで、また特性があって違うのかもしれませんが、聴覚障害の場合は教員になるというのが学生さん方の1つの希望でもあるし、その意味では技大で免許が取れるということも、いい意味でアピールされてもいいのかなと思ったりもしています。そのためにはどういう教員になってほしいとか、教員としての基礎的な資質というものをしっかり育てなければいけないと思います。

詳細版は本学のホームページをご覧ください。



● 熊本地震により被災した方へのボランティアを実施

遠隔情報保障支援の実施 (PEPNet-Japan)

本学に事務局を置く日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) では、平成 28 年度熊本地震で被災した大学への大学間遠隔情報保障支援を実施して参りました。4 月 14 日の震災発生以降、被災地域の関係大学数校に対して必要な支援について確認を取りつつ状況を見守っていました。校内の安全が確認され授業が再開されてから、熊本県にある九州ルーテル学院大学からの要請を受け、特別プロジェクトの実施を決定し、直後に本学の磯田助手と三好准教授が現地にて操作方法等のレクチャーも担当しました。

支援の実施にあたりご協力頂いた大学は、東北福祉大学・宮城教育大学・同志社大学・大阪教育大学の 4 大学で、2 週間の準備期間の後に 6 月 29 日 水曜日より毎週 2 コマの授業に遠隔情報保障を提供してきました。特に東北の 2 大学からは、平成 23 年に発生した東日本大震災の際に全国の大学からの遠隔情報保障の支援を利用されていた経験から「その時の恩返しをしたい、少しでも役に立てれば」という強いご意向のもとご協力を頂きました。

今回の支援で用いているのは、本学の三好准教授が開発

した「T-TAC Caption システム」です。東北地区への支援経験以降、より簡便に遠隔情報保障の利用が可能となるシステムとして開発を進め、これまでも高等教育機関のみならず初等中等教育場面でも運用を重ねてきました。また、PEPNet-Japan「遠隔情報保障事業」として 4 年間実践を重ねてきた経験から、大学間での支援実施を円滑に進めるためのノウハウが各大学に培われていたこと、大学相互が協力しあうことのできるネットワークが形成されていたことに加え、支援での活用が可能なりソースを本学が有していたことも、今回のプロジェクト実施が可能となった背景にあります。

前期期間の支援の節目を目前にした 7 月 26 日 火曜日には、九州ルーテル学院大学・協力大学 3 大学と本学をテレビ会議でつなぎ、交流会を実施しました。この中では、離れた場所からもサポートができて良かったという声や、各大学の支援方法が学内の支援でも参考になっている、などの意見が聞かれました。

(障害者高等教育研究支援センター 磯田 恭子)

理学療法・マッサージボランティア

8 月 7 日から 8 月 9 日の 2 泊 3 日で、保健科学部の学生が理学療法・マッサージボランティアを行いました。参加したのは、鍼灸学専攻 4 年の上杉大さん、千代谷悠希さん、理学療法学専攻 4 年の岩田朋之さん、安江勝也さんの 4 名です。

岩田さんは、ロービジョンフットサル日本代表のキャプテンを務めており、5 月に佐賀県で行われたサッカー日本代表 (U-23) の試合に熊本の少年スポーツ団に所属する小学生 45 名を招待するなど、積極的に支援を行ってきました。

「他にも何かできないか」と仲間に相談し、本学で学んだ知識を生かしたボランティアをすることにしました。

これまで東日本大震災や、常総市で発生した水害の被災者に対してマッサージボランティアを行ってきた経験から、被災当事者だけでなく、避難所のスタッフを癒したいと思い、今回のボランティアでも積極的に施術させていただきました。

また、地元の小学生と交流する機会を設け、視覚障害に関する〇×クイズを行って理解を深めたり、全盲学生によるピアノの披露なども行いました。

上杉さんは「ボランティアで得られた貴重な経験は、卒後の臨床の場でも必ず生かしていける」と話してくれました。

(総務課企画・広報係)



小学生との交流の様子



施術する上杉さん

● 学生の活躍

パラクライミング・世界選手権で3連覇を達成

保健科学部情報システム学科2年の會田祥君が、フランスのパリで9月16日に開催されたIFSCパラクライミング世界選手権の視覚障害カテゴリーB2決勝において1位となり、3連覇を達成しました。

学内でトレーニングできる環境がないので、学外で練習を重ねてきた苦勞が実を結んだ結果だと思います。クライ

ミングが東京オリンピックの正式種目となったばかりで、東京パラリンピックの種目となるかどうかは今のところ未定ですが、今後の動向が注目されます。

(保健科学部情報システム学科 坂尻 正次)



ゴールに到達した瞬間



表彰式の様子

第54回茨城県身体障害者スポーツ大会に両学部学生が出場

第54回茨城県身体障害者スポーツ大会に両学部の学生が多数出場し、活躍しました。

水泳は8月27日 土曜日に笠松運動公園で行われ、保健科学部3年の千葉信野さんと上野裕太さんが出場しました。

陸上競技は9月18日 日曜日に石岡運動公園陸上競技場で行われ、途中から激しい雨の中、産業技術学部から2年生の渡辺崇人君、篠崎有斗君、石井悠貴君、田中康平君、鷲生源太君、高山翔太郎君、寺尾耀一郎君と1年生の古城龍志君、岩下虎太郎君の9名が、保健科学部からは1年生

の井上萌美さんが参加しました。井上さんの100m走の伴走者には、高校時代の恩師が駆けつけてくださいました。大会出場ということでみんな緊張しながらも全力でプレーしました。

なお、この大会は来年愛媛県で開催される全国障害者スポーツ大会の茨城県予選を兼ねており、茨城県の代表選手として選ばれることが期待されます。

(障害者高等教育研究支援センター 香田 泰子、
中島 幸則、栗原 浩一)



参加した学生達

● 第12回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムを開催

障害者高等教育研究支援センターに事務局を置く「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(以下、PEPNet-Japan)」では、聴覚障害学生支援に関する情報や実践を蓄積し、全国の大学に発信する活動に取り組んでおります。その活動の一環として、本学ならびにPEPNet-Japanが主催して、9月8日及び9日に、第12回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムを本学天久保キャンパス他で開催し、全国から大学教職員や聴覚障害学生、支援者等、約420名の参加者が集まりました。

1日目は、聴覚障害学生支援に関連した4つのセミナー(「基礎講座 障害者差別解消法と障害学生支援—聴覚障害学生の事例を中心に—」他)や聴覚障害学生支援に関する最新の技術に触れられる機器展示、本学の施設見学や教育研究活動などを紹介する「筑波技術大学見学ツアー」や「筑波技術大学活動紹介展示」など、さまざまな催しで大変賑わいました。また「聴覚障害学生支援に関する実践事

例コンテスト」では参加15団体によるポスター発表が行われ、それぞれの特長のある聴覚障害学生支援の実践を見ながら、参加者同士の活発な意見交換がなされていました。

2日目は、立場別に3つの企画(教職員・学生共通企画「ミニ講演会 聴覚障害学生のキャリアを見据えた教育・支援のあり方—障害者雇用促進法の改正とキャリア発達支援—」他)が行われ、それぞれ熱心な議論が交わされました。また午後に行われた全体会では、パネルディスカッション「障害者差別解消法で変わるべき聴覚障害学生支援」で、聴覚障害学生支援で起こりがちないくつかの事例をもとに、講師の若林亮氏(弁護士)、金澤貴之氏(群馬大学)、牧野容子氏(立命館大学)による事例検討がステージ上で繰り広げられ、障害者差別解消法にもとづいた聴覚障害学生支援への理解を深めることができました。

(障害者高等教育研究支援センター 萩原 彩子)



全大会の様子



実践事例コンテストの様子

● 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会との打合せを実施

9月2日 金曜日、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会(TOCOG)の方々来学し、天久保・春日の両キャンパスの施設見学をした後、本学関係者とアイデアソンの実施に向けた打ち合わせを行いました。

本学の持つ視覚・聴覚障害者支援技術と、学生たちが持つ技術・アイデアをオリパラの活力にできないかを議論し、「パラリンピックをテクノロジーで盛り上げよう」をテーマとするアイデアソンの実施に向けて有益な意見交換がなされました。また、本学教員グループも参加しているISseeプロジェクトのプロモーションビデオも公開され、これまで被支援者となることの多かった視覚・聴覚障害者が支援者となった情報保障実現のビジョンが紹介されました。

打ち合わせの中ではcaptiOnlineを使った文字通訳のデモも行われ、聴覚障害学生支援の一形態を体験していただきました。4年後の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、また、その後も持続可能性のある障害の有無にか

かわらず、誰もが誰かの助けになる社会を目指して、本学ならではの情報保障技術を用いた社会貢献を推進していきます。

(総務課企画・広報係)



打ち合わせの様子

● 第16回国際シンポジウム2016を開催

9月30日 金曜日、第16回国際シンポジウム2016が開催されました。今回は「障害のある大学生の留学支援～米国留学を例として～」をテーマとして、本学の学生を受け入れた経験のある米国の2つの大学から講師をお招きしました。日英逐次通訳、アメリカ手話逐次通訳、日本語手話通訳、日本語文字通訳、点字資料による情報保障体制のもと、180名を超える参加者がありました。シンポジウムでは、本学の犬越教夫学長の歓迎挨拶に引き続き、次の2つの講演が行われました。

- 基調講演1 Danilo Torres (ダニーロ・トーレス) (ギャロレット大学、研究支援・国際協力室、国際関係担当官)「ギャロレット大学における留学成功のための道筋」

- 基調講演2 Kirk Kluver (カーク・クルーバー) (アイオワ大学、入試担当 事務局、事務局長)「アイオワ大学における視覚障害学生のサポート」

ダニーロ・トーレス氏は、2007年11月に本学と交流協定を締結したギャロレット大学(米国)の国際関係担当官であり、同大学の戦略的海外パートナーと留学事業の策定

を行っています。講演では、留学中の修学支援だけでなく、入学前のアメリカ手話学習支援などについての説明がありました。

また、カーク・クルーバー氏は、15年以上アメリカ各地の大学における入試業務を専門に行っており、2013年3月に本学の協定校となったアイオワ大学における障害者向け学修支援サービスなどについての講演をいただきました。

基調講演に引き続き、パネルディスカッションが行われました。まず本学留学生センター設置準備室室長の松藤みどり教授より、本学の留学生受け入れ・送り出し状況についての報告の後、昨年度の米国短期留学の担当教員である保健科学部の井口正樹講師、障害者高等教育研究支援センターの小林洋子助教より、短期留学についての報告がありました。これらの報告を受け、引き続き、招聘講演者2名を交えて留学支援体制についての討議が行われた後、講演内容に関する質疑応答がありました。

(国際交流委員会委員長 西岡 知之)



ダニーロ・トーレス氏



カーク・クルーバー氏



パネルディスカッションの様子



集合写真

● つくば市職員対象のユニバーサルデザイン研修を実施

9月27日火曜日、つくば市庁舎にて、つくば市職員を対象にしたユニバーサルデザイン研修を実施しました。この研修は、本学とつくば市の連携事業の一つとして、つくば市聴覚障害者協会などの協力を得ながら、平成19年度から開始された取組みです。当初はつくば市中心地区、つくば市庁舎竣工後は市庁舎へと場所を替えながら、毎年開催しています。

デザイナーの井上滋樹氏によるユニバーサルサービスに関する講演の後、聴覚障害者とのコミュニケーション体験、視覚障害の疑似体験を含んだ窓口対応、視覚障害・妊婦・

幼児連れ・車椅子使用者・高齢者などの疑似体験を含んだ市庁舎探索、体験に基づくディスカッションなどの講座に62名のつくば市職員が参加しました。講座の一部には「産業技術プロジェクトA」の一環として聴覚障害学生による体験講座の立案・実施が取り入れられました。

(学術・社会貢献推進委員会 櫻庭 晶子)



高齢者疑似体験による市庁舎探索



学生とのコミュニケーション体験の様子

● 産業技術学部 授業見学会を開催します

天久保キャンパスにて、産業技術学部の授業見学会を追加開催いたします。産業情報学科と総合デザイン学科の授業の見学、障害者高等教育研究支援センターやその他の教育・研究施設などを見学・体験できます。

受験希望者のもとより、保護者および学校関係者の方々のご参加をお待ちしております。

申し込み方法など、詳しくは本学ホームページをご覧ください。

開催日時：平成29年1月20日 金曜日

13時から15時10分(予定)

見学コース：

1. 産業情報学科(情報科学専攻、システム工学専攻)を中心に見学するコース
2. 総合デザイン学科を中心に見学するコース
3. 産業情報学科と総合デザイン学科の両方を見学するコース



産業技術学部授業見学会

2017年1月20日(金) 13:00~
参加者募集中!

産業情報学科、総合デザイン学科の授業見学に加え、寄宿舎などの本学施設見学や、入試にも役立つ体験授業も実施します!

筑波技術大学ニュース 第38号

発行日 平成28(2016)年12月

E-Mail kouhou@ad.tsukuba-tech.ac.jp

発行 筑波技術大学 広報室

〒305-8520 茨城県つくば市天久保4丁目3-15

Tel 029-858-9311

編集 筑波技術大学 総務課

Fax 029-858-9312

URL <http://www.tsukuba-tech.ac.jp/>